

ベルとエファは二人の人形少女

coco77

ベル：東のうみどり亭の主。町一番の発明家。

エファ：人形少女。東のうみどり亭で働いている。

ファーネ：エファの姉妹。人形少女。エファの30倍の能力をもつ、自称「特注品」。

「おはよう。エファ」とベルが朝の挨拶をします。とそのカウンターには、とても困ったような顔をしている、二人のエファがいたのです。

「あれ？」と、東のうみどり亭の主である、ベルは見直しますが、錯覚ではありません。

「人形職人さま、つまり、マスターが新しくおつくりになったんです」と、エファがいいました。

「そうなんだ。じゃあどっちが本物のエファ？」

そうです。それはとても困ってしまうではないですか？

「わたしです」と、最初にベルに話しかけたエファがいます。

「わたしの名は、ファーネ。よろしくね」ともう一人のエファがいます。

「はい、よろしくって!？」ベルは慌てます。

「わたくしたち、ベルを探していたところなの」とファーネがいます。

「でも、それだけ似ていたら、どっちがどっちか分からなくて、みんな混乱するって!」と、ベルがいます。

ところが、ファーネは。

「ご心配には及びません。ファーネは特注品で作られたモデルで、外見こそ、エファに、似ていますが、能力は三十倍の違いがあります」

「じゃあ、見せてよ」と、ベルにも、二人の見分け方がわかってきました。

ジュースを飲むときに、ストローで飲むのが、ファーネ。スプーンで飲むのが、エファなのです。「そういえば、新しい機械人形が、領主さまのお屋敷にやって来るって話があったけど、もしかして、あなたのこと？」とベルは、ファーネにいます。

「そうです。そして、今日は、ここ、姉妹が働いている、宿屋「東のうみどり亭」を訪ねたのです」と、ファーネが幾分かは自慢そうにいました。

「じゃあ、ファーネ。そこの食器洗ってくれる?」「はい? わたしは、領主さまに呼ばれてきているのですから、仕事ではないものは、仕事のうちに入りません」とファーネ。

どうやら、ファーネはちょっと癖があるようです。エファはそのてん、素直なのですが・・・。

「じゃあ、ファーネは町には詳しくないから、案内しよっか?」「結構です」とファーネはいいました。

エファは黙ったままです。

そして、ファーネといっしょに、屋敷に向かう途中で、こっそりと、ベルはエファにいいました。

「あの子になにか言われなかった? あなた、今日、ずいぶん無口よ」

「そうですね。領主さまにお仕え出来るのって、光栄な誉れですよ。でも。わたしは」

と、エファがいます。

「別にそんなこと、気にしなくてもいいのに」とベルはエファに優しくいってあげます。「嫌い・・・というわけではないのですが、パターンが違いすぎるのです。これが、特注品と試作品の違いでしょうか？」

「君、君。そんなこといっていたら、量産型が出てきたらどうするのだ？」とベルは、エファに、とおくの山のふもとを、ぎしぎしと歩いている、巨大な機械人形を見せながらいいました。

そこは、領主さまの演習場なのでした。「この町が、君たちだらけになっても、わたしは、発明家として、不思議に思ったりしないわ」

「それは、もしかして皮肉かしら？」とファーネがいます。「違うよ。君たちを見ていると、そんな気がするだけ」とベルは二人目のエファに、いいます。

さて、東のうみどり亭のある町では、天気を操る機械が発明されたり、ラジオが発明されたりしています。

と、そこに一人のセールスマンがやって来ました。彼は手に、「祈りの避雷針」を、もって、やって来たのです。「これさえあれば、雷も怖くない。だって、これは雷よけの避雷針なんですよ」とその男がいった。

「いったいどんな仕組みなんですか？」と観衆を代表して、エファがいます。「説明しますね。避雷針は、地面に雷のエネルギーを逃がすことで、その威力を、低減させるのよ」とベルがいました。

「そうだ。それだけじゃない。この避雷針には「祈り」の力がくわわっているのさ」とセールスマンはいいます。どっと人々は笑いました。そんなことがあるはずがないと思ったので。

「ねえねえ、聴いて聴いて、セールスマンさん」と町娘のひとりがいます。「これはラジオなのよ。あんたも何か歌ってごらんよ」とセールスマンにいます。「わたしは歌は苦手ですね」と言い返します。

どっと再び人が笑いました。

さて、そのセールスマンが帰ったあと、ベルとエファたちは、その「パーツ」を使って、さっそく新しい発明に取り組んだのでした。

「これは特別なパーツが使われているわね。そうね。「天使の針」かしら」

さて、次の商売が始まります。

このラジオは双方向型です。とベルはいった。つまり。と続けて、「つまり、無線機のようなものなのよ」とベルはいう。その機械を使って、音楽を作ることはできますか？と音楽家がい

った。
そうね。星からの電波を拾って、それが音楽に変えて、聴けるかもしれない。とベルは答えます。

そうではなくて、ラジオの周波数を変化させることで、音楽を作り出すことができますか？

ベルは少し困ったような顔をしました。宿屋「東のうみどり亭」には、ラジオの発信機があって、それで、ラジオ放送を流しているのです。

しかし、ぱっと明るくなったと思うと、その音楽家にいます。そうね。遺跡からの「ガラ

クタ」にはそういったものもあったかもしれない。とベルは答えます。

でも、わたしのような歌を歌うものは必要なくなるでしょうね。

「違うのよ。かつての複製芸術時代では、音楽家のプロが、主流を占めるようになったわ。あなたにも、チャンスがあると思う」

それを聴いて、音楽家の表情が、明るくなります。でも。

「わたしは天体からの音楽を聴きたいのです」といいます。メランコリックな表情で。

そんなこといわれても。とベルは思います。そうです。それは、双方向型のラジオ、つまり無線機を発明したときの顧客が、この調子なのです。

「かつて、人類は天体からの音楽を聴いていた。といえます。文明の再創造とは、このようにあるべきではないでしょうか？」

それを、聴いて、ベルはイライラするのを感じました。結局、その音楽家は見果てぬ夢を見ているだけなのです。ベルには、毎日すべきことがありましたし、人形少女のエファにもファーネにも、毎日すべきことが、ありました。

「音楽家さん、今日は契約は無理みたいですね」とベルがいいます。

しかし、その音楽家が、夕刻の帰り際、もっていたトランペットを吹くと、星々から、流れ星が幾筋も舞い降りてきた。という。

そして、さらに、翌週。「ベールー」とエファがいいます。

「わたしの大切な小瓶、どこかへやらなかったの？」と人形少女のエファがいいます。

とベルは必死に、ガラクタを削りながら、いいます。「小瓶がどうしたって？」

ベルも知らないようです。「それなら、お前さんもっていったらどうが？ 今朝、東のうみどり亭から」とストライダーがいいます。野伏には、ストライダーではなく、アンダーソンという、立派な名前があるのですが、ストライダーで、十分だ。といていたのでした。

「あー、ファーネね。わたしのものを持っていたのは！」

と、エファ、そしてストライダーの二人は、ファーネがまつ、港へと向かいます。エファのそっくりさんといえば、エファの30倍の能力をもつという、エファの姉妹、ファーネ以外にはいないではないですか。それに、ファーネは、エファの持ち物に興味を、示していましたし。

「こんなものの何が欲しいっていうんだい？ ただの海水じゃないか？」

「それは・・・わたしがこの町に来たとき、ベルからもらった海水なの。わたしがずっと、長く、この町に留まりますように、と願いながら」

「願い・・・か」とファーネは感慨深げにいいます。

「それなら返してあげるよ」とファーネは高々と小瓶を放り投げたかと思うと、ジャンプしてキャッチします。

「お嬢さん、冷や汗を、かかせすぎだぜ」とストライダーがいいます。

「誰。こいつ？」とファーネが冷たくいいました。

「ストライダー。野伏よ」とエファがいいます。

それよりも、ストライダー。とエファがいいます。「おうよ」

と二人は散開して、ファーネ目がけて突進。ファーネは持ち前の機動性で、俊敏に逃げ回り

ます。

「小瓶を返しなさい」

「分かった。分かった」とファーネがいます。

と、それが返されます。「思い出のものってわけか」とストライダーがいます。

そう。それはエファとベルをつなぐ、大切な絆の品なのです。

「あー、こんなところにいた」と、ベルがやって来ます。

「なによ。赤くなって」とベルがエファにいます。

「その・・・なんでもないわよ」とエファがいますが・・・。

「この小瓶の海水、あなたが入れたのかしら？」とファーネが尋ねます。

「そうね。じゃあ、あなたにも入れてあげるね」とベル。

彼女は瓶を見つけると、それに海水を入れます。酸化防止剤といっしょに。

「わたしに？」とファーネ。「そう」ベルは不思議そうにいます。

「それは光栄ですわね」とファーネがいます。そして、優しく微笑んだのでした。

「って、ベルはエファのものですからね！」とエファ。

「あら？ わたくしは、ベルには興味はありませんわよ？」とファーネ。

「もしかして、エファって、ベルに惚れている。とか？」

「そ、そんなことありませんね」エファは確実に動揺しています。

「さあ、どうかしら？ 思わぬ、ライバル出現で焦っているのは、エファじゃない？」とベルも意地悪くいいました。

ぷしゅーと、エファが真っ赤になります。こうして、東のうみどり亭の一日は、のんびりと過ぎていくのでした。

「さあ、今日も料理の支度をしなくちゃ！」とベルがいます。

宿屋には、ストライダー（野伏）、そして、幾人かの客が泊まっています。かれらのために朝ごはんを用意するのです。そして、それはとてもおいしいと、みんなが褒めてくれます。「今日の朝ごはんは、ベーコンエッグ、そしてハムパンと、温野菜のサラダね」

と、眠っていた客が、厨房からの、いいにおいにつられて、ベッドから起きてきます。食堂を兼ねた、広間に案内されます。そこでは、ベルとエファが作った、料理が並べられているのでした。それには、なんと、おまけで、プディングがついています。

「特別サービスよ？」とベルがウィンクします。そして、客たちが街へと散って行ったあと、宿屋の仕事は、エファにまかせて、ベルは発明に取り掛かるのです。

「ふむふむ。とても上手に、料理ができる機械。これはフライパンに似ているけれど、ひっくり返して、蒸し焼きにできます」と、ベルは古代語を読みます。もっとも古代語と今の言葉は、さほど変わらないのですが。「さっそく、夕食で試してみましよう！」とベル。

と、ベルとエファは買い出しを済ませると、さっそく、その特別なフライパン、それは西の遺跡のレプリカなのですが、つまり、その西の遺跡には、小規模な機械工場があったのでした。

そして、さっそく料理の開始です。「とても美味しく温野菜とサーモンの蒸し料理ができました！」あとはこれに、パンをくわえて出来上がりです。

こうして、仕事があるのは、うらやましいことではないですか？

さあ、今日もお仕事です。と、ベルがいました。そうです。ベルにはすることがたくさんあ
るのでした。一方、エファのほうにもすることがあったのでした。

二人は、むっとしてにらみ合うと、くすくすと笑いだします。

「じゃあ、勝負しない？」とベルはいいます。

「どんな勝負でしょうか？」と、エファ。

「どっちの仕事が楽でしょう？という勝負！ 仕事の取り換えっこをするのよ」そして、ベル
はエファに。エファはベルになりました。

「あー、あのね。エファ。これは、「ごっこ遊び」だから、本気にならなくても、いいのよ。つ
まりその、設備、壊さないでね」とベルはいうと、買い物に出かけます。

ひとり、のこされたエファは、ベルの部屋にあった、小説を手にとると、ゆっくりと読み始め
ます。「ウは宇宙のウ？」SF小説のようです。エファは、前世期のロシアの推理小説を探し出
すと、読み始めました。ゆっくりと時間が過ぎていきます。エファが、こうしてられるのも
、ベルのおかげ。

そして、ベルがこうしてられるのも、たぶんエファのおかげなのです。

ベルの部屋の室内は整っていました。奇妙な機械のガラクタなどは、きちんと丁寧に、分類
されています。

もっとも、地下室ではどんなことが起こっているのか知りたくなるじゃありませんか？ 少な
くとも、エファはそうでした。このロシアの推理小説を読み終えたら。とエファはぼんやりと思
います。地下室に行こう。と。

でも、その決意は、その長く、心地のいい、わくわくどきどきする小説の世界のようなものな
のです。そう、エファは感じました。と、そのとき、ノックの音がしました。エファは立ち上
がります。小説を肘掛け椅子におくと。

「あなたは、領主さま。」と驚いて、エファはいいます。「ベルくんは？ と、いないよう
だね」「そうです。その買い物です」

「十中八九、遊びに出かけたんだと思うが……。しかし、君がいてくれて、嬉しい」とハンズ
がいいます。

そうです。領主はハンズといっしょにやって来たのです。考古学者のハンズと。

「では、待たせてもらおう」と、一階へと向います。慌てて、エファが案内しようとする
と、二人とも、いいよ。といってくれたので、エファは、ふたたび読書ができたのです。「長い長い
雨だった。そう。泥のような雨だ。そう、かつて、わたしはそうだった」とエファはつぶや
きました。

「待たせてすみません」ベルは目を丸くして待っていた二人にいいます。

「で、エファは？」

「君の部屋さ」と二人がいいます。

と、ベルがこんこんと軽い足音とともに、階段を駆け上がると、そのエファがいるはずの、自分
の部屋へと入ります。と、エファは、推理小説を抱えたまま、まどろんでいたのです。

ふたたび、彼女はとってかえします。「待たせて、ごめん」とベル。

「いや、退屈こそ、人類には必要なものさ」と領主はいいます。「その通りです。かつて人類が滅びた原因も、退屈さに勝てなかったからでしょう。ちょうど、小説のように、どきどきするような、体験が必要だと感じたためかもしれない」と、ハンスがいました。

彼も手持ち無沙汰に、ペーパーバックの小説をもっています。

「退屈さこそ、偉大な芸術の母である。しかし、文明は、その「退屈さ」を奪おうとしてきた」と領主がいました。みんな、その言葉に驚きました。「なに、わたしだって、考えを変えることぐらいあるさ」と領主。と、眠りから覚めた、エファも降りてきて、一気に場は賑やかになります。

「偉大な小説、あるいは芸術は、すべて、退屈さから生まれる」と、領主が持論を述べます。

それから、しばくして……。ベルはいました。

「あなたにはもっとするべきことがあるんじゃないかしら？」

エファは答えます。

「することはちゃんとしています。厨房、料理の下ごしらえ、ベッドのシーツの洗濯。そして、東のうみどり亭の掃除」

そうです。働きもののエファのおかげで、東のうみどり亭は、いつも、ぴかぴかに、磨き上げられていたのです。

ぐっと詰まった、ベルはいいます。「うーん。困ったなあ。あたしには、これ以上のことができない」

「ハンスに手伝ってもらったら？」「無理よ。彼だって、忙しいもの」

となると。「ストライダー！ 起きなさい！」「は、はい？」とストライダーと呼ばれた男、つまり、守り人のストライダーはあわてて、はねおきます、「今日の仕事はこれ」とメモ用紙が手渡されます。

「あたしたちは、夕方、町に観劇に出かけるから、じゃあね。よろしく」あとに、のこされた、ストライダーは……。という。えーと、リンゴの皮をむく……。か。

と、ある日の出来事です。

ベルとエファがいつものように、お昼ご飯を食べていると、思い切って、エファはいいました。「わたし、旅行がしたいの」「旅行？ なんで？」

そうです。この時代、トラベルというのは、まだまだ珍しいものでした。

蒸気機関車が開発され、それを見るために、エファは、すこしだけ、そう、ほんのすこしだけ、東のうみどり亭の仕事から、お暇させてもらって、その西の大陸にある、蒸気機関車を見に行こう。というのです。

「ふーん。分かったわ。じゃあ、わたしも行く。ということで」とベルは付け加えます。「いいのよ。そんなの」とエファはいつになく、深刻な表情でいいます。

「なによ？」 「ベルには、宿屋の管理の仕事があるでしょ？ それに、毎日の発明だって」
「あのね。あたしは、あなたの保護者なの。だから、あなたの安全には、責任をもたないといけないの」

と、ベルはいいます。それももったもなことでした。

それに、エファが、旅行する。といったときから、ベルには、なんだかエファがこのまま、どこか、とおくへといってしまうような、そんな、不安な気分させられたのでした。自分でもよく分からなかったのですが……。結局、エファには、付き添い人がくわわることになりました。

「それなら、任せてくださいや」と、ストライダーがいます。彼には、アンダーソンという、立派な名前があるのですが、いつも、野伏という呼び名で呼ばれていたのです。「いいこと。こっそりつついていくのよ」とベルはいいます。

と、翌日、エファは馬車で旅立ちます。その蒸気機関車のある大きな町まで。

「いつか、この蒸気機関車が、わたしたちの町にもやって来るのかしら？」とエファは不思議そうに、その、黒々とした、鉄の巨人を見ながら、いいました。

そうです。それは、あまりにも立派過ぎて、名前があったのでした。つばさ。とか。はやて。とか。と、そのなかで、エファは探していたものを見つけたような気分になりました。

いえ、そうではありません。エファとこの機械はもともと同じものなのです。それは、人間が作ったものですから。

そして、エファが蒸気機関車を見たい。といったのは、やはり、ウソの気持ちなのでした。本当は、自分のマスターに会いたかったのです。ファーネや自分たちを作り出した、マスターが今、どうしているのか？ それを、ファーネはどうしても教えてくれませんでした。ですから、機関車に乗って、その故郷の町を訪れることにしたのです。

と、エファが、体の向きを変えると、その停車場には、ベルが待っていたのです。ストライダーがいっしょです。

「なんで、ベルが？」エファは驚きます。

「え、だって、ここ、東のうみどり亭がある町だよ」と、ベルがいます。

「違うと思いますけれど。こほん」

「あなた、どこへ行こうとしていたの？」

「……」

「故郷ね」とベルがいます。そうです。ストライダーが彼女の行き先を、無線で、ベルに連絡したのです。

「宿屋はどうするの？」

「ファーネがしてくれるって」とベルがいます。

「エファ」と、ストライダーとベルの二人が同時にいて、決まり悪そうな表情をしたあと、ベルがいます。

「エファ？ あなた、もしかして、帰りたいの？ 故郷へ」

「不思議ですね。人形には、故郷はないのに」とベルは、その黒々とした鉄の巨人を見あげな

がら、いいます。

「エファ、帰る」とベルはいいます。悲しそうに。

「そうね。あなたは、帰るつもりなんだわ。わたしたちを捨てて」とベル。

「・・・約束します。戻って来るって」「ホントに？」と彼女は疑わし気にいいました。「本当です」とエファがいいいます。

そして、三日間が過ぎました。そのときの、ベルの様子を見たら、だれもが、ちょっと変だといひでしょう。パン焼き器で、ピザを作ったり、ガラクタで、パンを作るようなものですから。

そして、ようやく、三日後の朝、エファは東のうみどり亭に、帰って来ました。

ファーネとベルが、待っていました。「わたしのマスターは、お元気でした」とエファはいいいます。

「ただ、年のせいか、わたしのことを、もう覚えていないようです。腕は落ちていないのですが・・・」とエファが付け加えます。いったい、それがどんなことなのか、ベルには想像がつかきません。

「エファ？ 悲しかった？ そうね。わたしは、ずっとそれを、身近に見てきてのよ」とファーネがいいいます。エファそっくりの人形が。「だから、マスターの話題をしようとするひ、ファーネさまは、いつも、逃げておられた」とエファがいいいます。「そうよ」ファーネが認めました。

「まあ、ここで、立ち話もなんだし。エファ。お風呂に入ひて、体をきれいにしてらっしゃい」とベルがいいいます。

こうして、東のうみどり亭の一日はゆっくりと過ぎてゆくのでした。

さて、なにもかも元通りに戻りました。エファはベルのもとに帰って来ましたし、ベルにはなにも不安に思ひうことなどないではないですか。けれど、ベルには、いつかエファがいなくなるのが、寂しくて仕方ないのでした。

さて、本日の発明。それは言葉を話す不思議な人形なのでした。ベルがそれを作ったのです。それはきつと、ベルが寂しさを感じて、作ったものなのでした。

「驚いたわね。「ガラクタ」なしで、ここまで作れるのは、わたしのマスターだけかと思ひっていた」と、エファがいいいます。そうです。これは西の遺跡で発掘される「パーツ」なしで、動いているのです。

「えへへ、すごいでしょ？」とベルはいいいます。ところが、その人形は、言葉は話しますが、それは、誤った判断による言葉や言動なのでした。はじめはみんな気づきませんでした。

だって、町一番の発明家である、ベルが作ったものに、間違いがあるはずがないじゃないですか！

「シルマリル、お茶の用意しておいて」と、そこに、その人形、シルマリルは、どぼどぼとベルにお茶を注いだのでした！ ベルの頭に。

困った、ベルに相談された、エファは、そこで、彼女が、シルマリルを引き取ることにしました。「じゃあ、今日は部屋で大人しくしてひてね」とエファは、東のうみどり亭のある、エファの部屋にひる、機械人形の「シルマリル」に向ひて、話しかけます。

と、それからしばらくして。 がっちゃん。がっちゃんひ、エファの部屋から物音がします。

「なんてことするの！ シルマリル！」とめちゃくちゃになった、自分の部屋を見て、人形少女のエファは叫びます。「ここは楽しいー」とシルマリルがいます。

やれやれ、こいつは知性体とは言えないんじゃないですか。と客たちがいます。「エファ？」とシルマリルが悲しそうにいます。

「うん。あなたは修理してもらう必要があるみたい。明日ね」エファはそう答えるのが精いっぱいでした。

そして、ようやく落ち着いたときには、夜になっていたのです。と、そこに怪しい影が窓から、忍び込みます。「へへへ、ここはなんでも、とんでもがない「ガラクタ」があるっていうじゃないか？ ついでに店のお金もいただきだ」と、そこへやって来たのは、シルマリル。「なんだ。お前？」と泥棒がいます。「お前は、泥棒！ 悪いやつだ！」とシルマリルはいます。

どしん。どしん。泥棒とシルマリルがもみ合いになります。と、物音を聞いて、ストライダーや、エファ、ベルたちがやって来ます。

「シルマリル、いいことしたね」と、ベルは、泥棒を、ロープでがんがらじめにした、その人形にいます。

ところが、シルマリルは答えません。「ああ、シルマリル。あなたのパーツが外れているわ。これじゃ治らない」

「シルマリルはいい子だった。わたしたちは、いつも邪魔に思っていたけれど」とベルたちがいます。

そのなかには、悲しそうなベルとエファ、そしてファーネの姿もありました。（ファーネはいつしか、ここ、東のうみどり亭に泊まるようになっていたのです。）

と、再び、ベルとエファ、ファーネの話に戻ると、ファーネは、マスターのことを伝えたことで、次第に素直な性格になりましたし、エファとも仲良くなりました、エファは、東のうみどり亭で、相変わらず働いています。そして、ベルは、というと、西の遺跡から発掘される「ガラクタ」のことを町で一番よく知っているのは、ベルとハンスだけなのです。こうして、三人は「幸せの三姉妹」と呼ばれるようになったのです。